
至高の作戦

虹色遊戯

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

至高の作戦

【Nコード】

N1050E

【作者名】

虹色遊戯

【あらすじ】

大金が必要な若者たちが裏スロットで大金を稼ぐことに・・・スロットを題材にしたギャングブル小説！（になる予定）

第一話

「朝倉秀行の場合」

俺の名前は朝倉秀行　24歳　いわゆるフリーターだ。
今金が必要だ。

それがなぜフリーターかというと先々月のこと、勤めていた会社が倒産したからだ。

何でも社長が不渡り手形を出したかという話だが新入社員の俺には詳しい事情までは通達されなかった。

すぐに新しい職を探したがある程度の給料を確保できる職場など早々見つかるはずもなく今はフリーターをしているわけだ。

こんな俺が暮らしていけるのは大学生時代に友達に教わったスロットで食い扶持をつないでいるからだ。

打ち方は一通り教わったし、目押しもできた。

何より今住んでるところの近所にはいわゆる優良店が在ったからだ。大学卒の初任給よりは稼げているといったところだがそれでもまだまだ足りない。

なぜ俺がそんなに金が必要かというと幼馴染兼彼女が心臓病で手術するには大金が必要である。

彼女の両親は彼女を生んですぐに交通事故で亡くなり彼女は生後数ヶ月で親戚中をたらいまわしにされた拳句孤児院に預けられた。

俺もその孤児院で彼女と育ってきた。

幼い頃の彼女は心臓病お患っていなかったため普通に遊んだりしていた。

かくれんぼ、おにごっこ、時にはままごとに付き合わされたり・・・しかし小学校を卒業する頃、彼女が初めて倒れたのだった・・・僕たちの目の前で苦しそうな表情で・・・

医者と言うには遺伝による後天的な心臓病らしいが学のない俺には

詳しいことはわからなかった。

手術をすれば直るというのがドナーも見つからずそして手術費用など莫大な金が必要だということを聞かされ愕然としたのだ。

そして彼女は中学もろくに通えず病院のベッドで日々をすごしてた。そんな彼女を元氣付けるために俺はしょっちゅうお見舞いにいくってくだらない話で盛り上がったらしい。

そんな彼女を護りたい、普通の暮らしをさせてあげたいと思うのにそんなに時間はかからなかった。

高校、大学と国公立の大学を出るため必死に勉強しそして卒業した。いわゆる勝ち組人生にいる、このままならもう数年で彼女の手術費用が稼げるのではないかと思った矢先の倒産だ。

ここからどうやって彼女の手術費用を捻出しようか考えているときに彼に出会った・・・

第二話

「九条光の場合」

俺は九条光 25才

いわゆるボンボンてやつだ。

親父は弁護士だし母親はこの辺では有名な不動産関係の一人娘で遺産はものすごいことになるといわれているし一番上の兄貴も弁護士をしているし二番目の兄貴は警視庁に勤めていて先月昇進したただかつて言っていたな。

そんな兄貴たちと比べ俺は高校大学と大していいところに進学できず高3からスロット漬けという人生だ。

家族はみんな3人も子供がいれば落ちこぼれの一人もできると思っているみたいで家族からしたら俺は迷惑な存在なのかもしれない。犯罪などで九条家の名を汚してほしくないらしく生活に困らないだけの金を毎月振り込んでくれるがそれがまた俺の苛立ちを掻き立てる。

大学卒業後、就職もしたが俺に人の下で働くのは性に合わないらしく上司と喧嘩して辞めてしまった。

結局こうしてパチ屋で知り合ったやつらとのりでスロットをしているという体たらくな日々だ。

そんなある日「九条さん、最近駅の近くにできたA店でハイスペック機に毎日6つかつてるみたいという話聞いたんですけど行ってみませんか？」

「あ、俺もその話聞いた。すっげーでてるらしいじゃん！」

俺もその話は聞いていたがまわりのみんなの耳にも入ってるみたいだ。

「そんな店なら並びもきついだろうし、6取れなかったときに移動できなかつたら最悪だろ？」

「でも久しぶりに万枚だしたいっすよ。なあみんな？」

この店、俺たちがいつも通っている店は客層に中高年が多く6でもしよっちゅう空くしなにより朝の並びが1時間前でも余裕という店A店に比べれば設定状況は確かに悪いが一台しかない6でも100%に近い割合でとれるほどの店なら俺はそれでいいし自分にとって優良店とよんでもいいと思ってる。

「ならお前ら今日は偵察がてらA店に行ってきたらどうだ？こっち
は今日たいしたイベントなわけでもないし」

「マジっすか！？じゃ、いつてきますね！！」

『こいつらとつるんで目標金額まで金をためるにはあとどれくらいかかるかな・・・』

そんなことを考えながら入店したんだ・・・
なんでもいい。

どんな職種でもいいから開業し自分ひとりでやっていけるといふことを家族に見せつけ、そして俺は落ちこぼれなんかじゃないと認めてもらうんだ。

それが俺の夢ってやつだ・・・

第三話

「2人の出会い」

今日はいつものノリうち軍団の姿が見えない。

いや正確に言うリーダーらしき男以外の姿が見えない。

おかげで立ち回りやすいからむしろ俺には都合なわけだが・・・
話は変わるが今日は『ニコニコ市場』という2台並びで高設定投入というイベントだ。

6と4をならべて他は1というのがこの店の癖である。

狙い台を難なくゲットできたが12時を回った時点で6ではない雰囲気だ。

たぶん4だろう。

右隣りがものすごく6っぽいんだがやめそうな雰囲気でもない。

他にも6はあるだろうが今日に限って空き台に6はなさそうだ。

と思いホールをぐるりと一回りしてきたら右隣りがいつの間にかやめていてさらに人が座っている。

打っていたのが若い兄さんだからやめないだろうと思っていたんだが・・・

しかも隣にすわっているのはノリうち軍団のリーダーだ。

「今日はついてないな・・・」とぼそりという

「まったくだ」とリーダーらしき人が言う。

「俺は九条光ていう。何度かホールであってるから顔はわかるだろう？」

「ええまあ。あ、俺は朝倉秀行ていいいます。今日は他の皆さんどうしたんですか？」

「あいつらか？駅前にできたA店の様子見に行くつてさ。今日のイベントなら6取れるだろうと思っていたから行かせたがことごとく4しか座れなくてな。やっと6らしき台見つけられてよかったよ」

「なるほど。お互い2択は弱いんですね。僕も4ぱいので移動しようと思っていたところですよ」

「まあ、夕方には何台か空くと思うからそれまでがんばるんだな」

「しかしびつくりしましたね」

「何がだ？」

「まさか九条さんに話しかけられるなんて思ってもいなかったから」

「寂しいのが嫌いなんですね」

「ははっ、家に帰れば彼女でもいるんでしょ？」

「そういえば彼女なんてここ数年いないな・・・」

「九条さんけっこうもてそうなのに!？」

「相手するのがめんどくさいんだろうな。朝倉君は？」

「まあ、好きな人はいますけどね・・・」

「なんだ理由ありか？」

「ま、いずれ紹介しますよ」

「お、リーチ目！」

そんなくだらない会話をしながらリーチ目や激アツ演出などで盛り上がりつつ夕方には6らしき機種が空いたので移動し九条さんと別れた。

そして閉店間際・・・

『今日は下皿プレイばかりでチヨイ勝ちつてところか。負けなかっただけよしとするか・・・』

と思つて換金所にいくと駐車場から声がする。

いつものノリうち軍団が九条さんと会話してるみたいだ。するつもりはなかったが盗み聞きしてしまった。

「九条さん！A店すごかったすよ。ほんと6かなり使ってますつて！」

「こつちよりあっちの店のほうがいいつすよ！」

「そうか。でお前ら今日はいくら勝ったんだ？」

「それが・・・俺がなんとか2000円勝ちで・・・」

「俺が17000円マイナスです・・・」

「今日一緒に狙い台を打っていたら一人頭2万くらいはプラスになっただろうに」

「いや、でも・・・ほんと優良店ですよ・・・」

「座れない6に魅力は感じないよ。それでもまだあっちの店がいいというのか？」

「癖をつかめれば大勝ちねらえるじゃないですか！」

「並びがきついから時給に影響してくるだろ？抽選ならいい番号ひけなきゃ結局運だろうし」

「で・・・でも・・・」

「それでもA店がいいというなら・・・解散だな・・・」

「そう・・・ですか・・・わかりました。俺も最近九条さんと意見がかみ合わないことが多々あったんでそろそろ潮時かなと思ってましたから・・・」

「お、俺もハイスペの6打ちたいんで・・・」

「じゃ、ここでさよならだ。戻ってきたとしてももう他人だからな・・・」

九条さんの声はどこか張りがなく感じた。

「いいんですか？軍団解散しちゃって」

「朝倉君・・・」

「いやいいんだ。あいつらけっこう足引つ張ることもあったし。問題があるとしたら・・・」

「2択の勘が悪いこと。」

「朝倉君、よかったら2人でのらないか？」

「2人なら2択をはずすことないですね」

『『よろしく』』

そして2人は金持ちへの第一歩を踏み出した。

第四話

〈 第一步 〉

九条さんとノリうちするようになって約1ヶ月。

信頼を育むには短いが友情を育てるには十分な時間だ。

この1ヶ月、今までより勝ちが増えた気がする。

イベントなどで高設定奪取率が上がったと思う、思うが相変わらず九条さんの二択の引きの悪さは異常だ。

狙い台が2台あったときなど7：3くらいではずしている気がする。そんななか今日は3の日みたいだ。

九条さんが高設定を打ち俺は狙い台をはずしてしまい天井狙いや高確狙いで立ち回っている。

もちろん高設定らしき台があれば打つんだがどうにも今日は空かない。

『 しかたない今日はあがるかな 』

自販機でジュースを買い九条さんのところに行く。

「 九条さん調子どう? 」

「 まあ6だろうけどな。どうにも高確でひけなくてな 」

「 まあ、でもまだプラスですね 」

「 なくならない保障はないけどな 」

確かにこの台は荒く夕方からでも3000枚くらい軽く吸い込む台である。

「 はは、特に打つ台ないし今日はちょっとよりたいたいところなんで今日はあがりますね 」

「 なあ、俺もついていいいか? 」

「 別に構わないですけどこの台どうすんすか? 」

「 勝ち逃げでいいだろ? 」

「 ま、この台に限ったらありですけどね 」

今日は2人合わせて+15000円

イベントからこんな荒い機種をうつて勝ちならわるくはないだろう。
車に乗って市内を目指している。

そういえば九条さんとご飯を食べに行くとき以外で一緒に出かけるのは初めてだ。

そんなことを考えていると九条さんが口を開く。

「で、どこいくんだ？」

「ちよつと花屋によらしてください」

「なんだ？デートなら俺は帰るぞ？」

「ま、そろそろ九条さんに俺の彼女を紹介しておこうかと」

そんな気はないが彼女という表現に照れてしまう。

「俺は好みにうるさいぜ？」

「絶対に渡さないですよ！」

花屋によつてから20分　こんなくだらな談笑をしていたらすぐに目的地に到着した。

「おい、ここ病院だよな？」

ちよつと九条さんがたじろいでいるのがわかる。

「ここの7階にいます」

エレベーターで上に向かう。

「九条さん・・・」

「なんだ？」

「彼女の前ではすみませんが僕に話を合わせてください」
すこしトーンが落ちた声で言うと

「あいよ」

と即答がきた。

「それと九条さん」

「まだなんかあるのか？」

「病院内は禁煙です」

「あいよ・・・」

しぶしぶ了承してもらった。

（711号室）

「ここです」

コンコンとノックをし「静香、はいるよ」と声をかける。
「どうぞ」

と間髪いれず返ってきた。

「お見舞いにきたよ、静香」

「ありがとう。」

「起きてて大丈夫？」

「今日は調子がいいみたい。それで、そちらの方は？」

「あ、ああ、会社の先輩で九条光さん」

「九条です、よろしく。ええと・・・」

「あ、私 相川静香といいます。ええと、あの九条さん・・・」
「ん？なに？」

「病室は禁煙ですよ」ちよつと困った顔をする静香も可愛らしい、
などと考えている場合じゃない。

「ちよつと九条さん！」

「まだ火はつけてねえよ・・・」

と返ってきた。

そんな問題じゃないが、九条さんのイライラが伝わってくる。
こんなにヘビースモーカーだとは初めて知った。

そんな空気の中

「あのねひでちゃん、せつかく来てもらって悪いけど私これから診
察があるんだよね」

「そうか、じゃ花を飾ったら帰るよ」

「また今度ゆつくり逢いにきてね」

水をくんで花を添えながら聞く。

部屋には沈黙だけが残る・・・

「じゃ、俺たちは帰るね」

「うん。またね」

どこか寂しそうだが仕方がないので帰るしかない。

終始無言で2人は車に戻った。

エンジンの音が聞こえたと同時にくらいに

「もう吸うからな。我慢は苦手なんだ」

「どうぞ」

と力のない返事。

その直後に

「彼女、静香ちゃんだったっけか。かなり悪いのか？」

九条さんなりに気遣ってくれているのだろう。

「なんでも後天的な心臓病だからで手術をすれば治るらしいんですが・

・」

「大金が必要と・・・」

「2、3千万はかかるって言われました」

「仕事してないことは言っていないの？」

「はい。勤めていた会社が倒産になったあとまたいい企業に就職したと嘘を言いました」

「心配させないため？」

「はい。なるべく負担はかけたくないんです・・・」

車内にエンジン音だけが響く。

短い沈黙。

「おい、朝倉」

「なんすか？」

「運転かわれ。今度は俺に付き合ってもらっ」

なかば強引に運転を変わって車は走り出す。

しばらく走り赤信号で止まったときに聞いてみた。

「九条さん。どこにむかってるんですか？」

「俺の実家だ。ここからだとい時間弱くらいかかるかな返事はしなかった。

九条さんの意図がつかめぬまま、九条さんの実家のこと、静香のこと、これからのことを考えながら窓の外を眺めていた。みなれぬ景色の中徐々にスピードが落ちていく。

「着いたぞ」

あつという間だった気がする。

目の前にある家を見て驚く。

「着いたってこんなでかい家が実家ですか？」

ガレージだけでもそんじょそらの家と遜色ない。

ペンションかなにかと間違えるくらいの大きさだ。

「親は何やってるんですか？」

素朴な疑問だが聞いてみる。

「父と兄が弁護士で母はここらで一番でかい不動産屋の娘だったかな」

淡々と説明はするが一向に家の中に入る気配がない。

「九条さん、中にはいないんですか？」

恐る恐る聞いてみる。

正直家の中の作りが気になったということもある。

タバコの煙を吐き一呼吸おき九条さんは言った。

「俺はな、この家じゃおちこぼれでな、いなかったことのように扱われるんだ」

返答に戸惑う。

「高校、大学と二流で勉強せず遊んでばかりだった。上の兄貴達の出来が良かったためおちこぼれがいても仕方ないって考えらしい」

言葉が見当たらない。

「実家には俺のものなんか何一つ残っちゃいないしスロで食っていける今未練なんかない。ただ・・・」

「ただ？」

「俺は親父たちに見返したい、認めてもらいたいんだ。いい大学でなくてもやっていける。エリート人生から外れても立派に生きていけるってことを・・・」

淡々と話す九条さんからは物言えぬ決意が感じられる。

「で、開業でもして立派に暮そうと考えているんだ。スロプロなんていつまで続けられるかわからないし親を見返すことはできないだ

ろっからな。」

九条さんもまた重いものを背負っていることに気づく。

「さて帰るか。今から戻れば下見にまにあうだろう？」

「あ、もう8時半じゃないですか急がないと！」

あわてて車に戻りそしていつものホールに車を走らせた。

第五話

くつながり

自分の素性をお互い話た日から2週間、今日も俺たちは相も変わらず朝からスロットを打つ。

今日は朝から九条さんと2人して高設定をつかんだ。

九条さんの提案で閉店時に差枚数が多いほうが勝ち、まけたら晩御飯をおごるといふ勝負をしているから負けられない。

俺が打っている機種は初当りが軽い純Aタイプの機種だ。

それにくらべ九条さんが打っているのは機械割りは同じくらいだが波の荒いART機種だ。

スロプロとして暮してきたはずなのにこういう荒い機種を普段から打つあたり俺には真似できない。

閉店時、俺は差枚数で+2854枚で九条さんは+892枚だ。

結果は歴然としたが九条さんが最後に大ハマリしなかったら危ない勝負だった。

「ちっ、負けか」

「ていうかもつと安定感ある機種うてばいいじゃないですか」

「機械割が100%越えていれば俺には関係ないんでね」

自信満々に答える九条さんだが実際この荒い機種で大負けせずブラスが続いているんだから脱帽である。

「俺うまい焼肉屋しってるんですよ」

「はいはいきますよ」

とあまり悔しがっている様子がないのがちょっと残念だ。

カランカラン「いらっしやいませー!」

「2名だけど」

「大変申し訳ありません、当店はもう閉店なんですよ」

夜の11時過ぎにお店にいけばそうなる。

実際これがスロットターの悲しいところでもある。

「しかたねーな。焼肉はまた今度で飲みにくぞ!」

「俺はらへってんすよ」

力のない声が出る。

が、うなだれていても仕方ないので九条さんについていく。

「ここで飲むぞ」

「 S L O T B A R B B 」

「スロットバー? てなんすか?」

「ああ、はいりゃわかるよ」

といいつつも扉を開けてる九条さんに遅れず入店する。

落ち着きのある内装、しかしスロット機種が何台かおかれている。

「いらっしやいませ、あ! 光じゃないか!」

「よ。ひさしぶり。相変わらず客いないな」

どうやら2人は知り合いのようだ。

「とりあえず水2つとスパゲティ2つな」

「OK」といって奥にマスターが行った。

その隙を突いたわけではないが九条さんに聞いてみる。

「マスターと知り合いなんすか?」

「ああ、昔一緒にのつてたんだ。で1000万ためたらバーを営
したいって言つてたんだけど、まさかホントにその夢をかなえるん
だからすごいよな」

「へー」と素直に声が漏れる。

「まだまだ借金やらなんやらあるんだけどね、とりあえず食えてい
けるよ。はいスパゲティおまち」と戻ってきたマスターだがどこ
か照れている気がする。

「ところで光」

「ん? なに?」

「この子紹介してよ」

「おい朝倉、自己紹介」どうやら食べるほうに夢中で紹介する気は

ないみたいだ、まあいいけど。

「えっと、朝倉秀行です。今九条さんとのりうちさせてもらってます。よろしく」

「僕は三宅昇流Shimizuといいます。光と同年。よろしくね」

さわやかないい人て感じの印象だ。

「三宅さん、スロットバーてなんなんですか？」と素朴な疑問をぶつけてみる。

「ああ、スロットしながら酒が楽しめるというコンセプトでやっているんだ。もちろんスロットは無料タダだよ」

「へえ、面白そうですね」

と素直な感想がもれる。

「でもあまり客来ないんだよね。あ、よかつたら好きな機種打つていいよ。プレミアがでるか3000枚以上出ると1杯サービスするよ」

「マジですか？何打とうかな」

4号機オンリーでより取り見取りな機種がある。ストック機からA機まで。

何を打とうか迷っているとき、カランカラン！と響き渡る。

「いらつしゃいませ」

と三宅さんの声。どうやらお客さんだ。

「へえ、スロット打ちながら酒がのめるのか、いい店だな」と40代くらいの男性が来店。

「好きな機種を打つてかまいませんよ。無料ですから」

「いや、仕事柄スロットに携わることが多くてね。今日は誰かが打っているのをみて楽しむよ。そっだな、水割りひとつ」

「かしこまりました。」

そんな話を聞きつつ俺は吉宗をチョイスし打ち始める。

「水割りです」

「ああ、ありがとう」

そんな会話を聞きつつ打っている。

九条さんは気づいたらＡＴ機を打っていた。

「お客さん、スロット関係のお仕事でなにをなされている方なんですか？」

「とあるパチンコ店でね、店長やらしてもらっているんだがね」

その言葉に反応する。そういえばどこかで見たことある風体だ。

「現状だとどうしても経営が大変なホールがあるがうちはあまりそんなことなくてね。お客さんに黒字分は還元したいんだがチェーン店の雇われ店長だからノルマはこなさにやらんしある意味大変だよ」とその店長は言う。

「心中察しますよ。５号機は売り上げがなかなか伸びないと聞きますから」

「でもまあ、とある場所がつつり稼いでいるからそろそろ独立しようかとかんがえているんだ」酒に弱いのかかなり大きな声になっている。俺に、たぶん九条さんにも聞こえているだろう。

「景気のいい話ですね。僕もあやかりたいものです」とマスターが言うと

「詳しくは言えないがね、裏で高レートのスロットを打てることを知っているんだよ」

声のトーンは落ちていてが確実に聞き取れた。

『裏の高レートスロット？』

「おい！」

誰の声かと思えば九条さんだ。

「なんだ君は？ん？どこかでみたことあるような？」

「い、今の話本当ですか？」と九条さんが珍しく荒い声で聞いている。

「なんだ、お前紹介してほしいのか？」

「え、ええ、お願いします。」

「タダでとはいわないだろう？」やはりふっかけてくる。

「謝礼は必ずします」

珍しく腰の低い九条さんだ。

「しかしな・・・うゝん」と悩む男性。

それと同時に思い出した。閃きとっていいだろう。

『俺たちがよくいく店の店長だ!』と気づく。

しかし声に出ていたらしく九条さん、そして男性ともお互いを認識する。

「ハハ、どこかで見たことあると思ったら店に来てくれている方か。」

「はい。いつもお世話になってます」

「なら話は早いか」

「じゃ、じゃあ教えてくれるんですか?」

「私と勝負して勝てたら、という条件なら」と男性が言う。

間髪いれず九条さんは「お願いします」と返事をする。

「それで勝負というのは?」

「そうだな、君たちとわたしで2対2で出玉勝負。私が負けたら裏スロット店を教えよう」

「もし僕立ちがまけたら?」

緊張する・・・

「そうだな、300万はらうってのはどうだ?」

とてもじゃないが大金すぎる。

「あの店にいけるといいうリターンを考えたら安いもんだぜ。通常の10倍以上のレートだからな」

通常の10倍!?

コイン一枚200円!?

「わかりました。2対2で出玉勝負ということですがチームの合計ですか?」

「そうだな。チームの差枚数の合計で多いほうが勝ちでしょう」

「わかりました。勝負の日程は?」

「明日の夜1時から7時までの6時間勝負で場所は私のホールで。明日の設定をそのまま勝負というのはどうだい?」

この条件が僕たちに有利に働くかわからない。わからないが少なく

ともこの男性には勝つための何かがあるのだろう。

「わかりました。今の条件忘れないでくださいね」

「楽しみだ。マスターお会計してくれ。せいぜい勝つ作戦を立てるんだな」と言い残し男性は帰宅した。

「おい光！なんかかつ手段はあるのか？」

「今のところない。明日の設定状況次第だな」と自信満々だった様に見えたのは嘘だったみたいだ。

「りんかけの6を2台使って確実につぶしにくるんじゃないか？」

「俺もそう思います。現行最強クラスの6を2台相手じゃ勝利は難しいですよ」

一転して微妙な空気が流れ出す。

「まあ、明日の設定状況を見てから考えるか・・・」

「大体なんで裏スロにいきたいんですか？」

「そうだ光、営業中にがさいれにあえば犯罪者扱いだぞ？」

「それでも俺たちは金が必要なんだ。10倍以上の出玉ならやってみる価値はあるだろ？」

「そ、それはそうですが・・・」

「ま、ダメな店ならいかなきゃいいだけの話だよ。それより明日のことを考えよう」

なんだか九条さんのペースだ。

しかしまけたら300万の勝負だ。絶対に勝たなければ・・・

明日が楽しみだ。

いい意味でも、悪い意味でも。

第六話

「絶技仕込み」

結局これといった対策が思い浮かばないまま九条さんと明け方まで三宅さんの店で飲んでいた。

その結果開店に間に合わずといった自体を招いた。

「頭いてー」といいながらふらふらで入店する九条さん。

あれだけ強い酒をばかばかのめばそりやこうなる。

つき合わされたとはいえアルコール度の低い酒ばかりのんでいたため俺はそれほど二日酔いに悩まされていないが。

そんなことを思いつつふらつく九条さんをかかえながら遅れながらの入店。

そしてすぐに思った。いつもより出ているように感じる、と。

どうやらあの店長が急遽新イベントで「ハイスペックバトル リンかけVS???」というのをやっているらしい。

今現在昼の3時で変則時間オープンのため開店から3時間以上たっているわけだがリンかけの島はもう1箱以上使っている客ばかりだ。「どうします九条さん？」

「どうもこうも店長の狙いはコレでわかっただろ。リンかけに6を2台いれ4、5で6の場所をわかりにくくする。下手するとホントにリンかけの6×2VSリンかけの4か5見たくなるぞ。」

二日酔いで具合が悪い割にはしっかり考えているみたいだ。

といってもトイレとホールの往復をけっこうしてるみたいだが・・・かなり正確に6の所在をはっきりつかまないといけないがリンかけという機種はボーナス確率以外に目立った設定差はない。

普段の6と1ならまだしも4や5で爆発されたら看破は難しくなる。

「九条さん、他のハイスペ機種どうですか？」

「マジハ口はまだなんともいえないがART突入率からしてあつて

4か。6はないと思う。」

「そうですか。ミドルスペックはのきなみ低設定くさいですし。リンかけの5で勝負しますか？」それもまた苦渋の選択ではある。

「それじゃ勝てるかもの作戦だろ？勝率をもっと上げたい。少なくとも一か八かで勝つみたいな作戦は俺は認めんだね」と最もな意見だ。

しかしホールでリンかけ以外ハイスぺ機種に6を使われている気配はない。あっても準高設定止まりだ。

このホールのハイスぺック機種での設置機種はりんかけ、マジハロ、赤ドン、2027、スパイダーマン、マーベルといった感じた。

ハーレムエースはバラエティに一台でしかも低設定みたいだ。

スパイダーマンも爆発してる台はなくあつて4か？

2027とマーベルも高設定は使われていないみたいだし、運の要素が強すぎると思うし看破に時間がかかる。

あれやこれやと九条さんと考えているが八方塞みたいだ。

勝負時間も長めに設定してるため運に頼るわけにはいかない、りんかけに6があるみたいだが4、5が大量に使われているため絞りきれない、しかし店長たちにリンかけを取られたら他にリンかけに勝てそうな台がないといったわけだ。

「くっそう、設定知ってる分向こうが有利すぎるってわけか・・・」
弱気な九条さん、しかし勝てなきゃ300万という勝負だ。運に頼るわけにはいかないのも事実である。

「設定状況そのままではなく同一設定での勝負にすればよかったか・

・・・」

「設定状況そのまま・・・」

その九条さんの台詞でなにかがはじけた。

「九条さん、そういえば設定は今日のままで勝負するんですよね？」

「そうだな。そう言ってたし。そうじゃなきゃリンかけにあんなに設定入れる意味がないからな」

「なら・・・ごによごによ・・・」

「お前、なかなかいい考えしてるな。それなら早速取り掛かるか・
」

この作戦が果たして吉と出るかはわからないが安易にりんかけの5を打つよりはましな気がしたただけだ。

僕たちは急いで作戦に取り掛かった。

「あ、もしも三宅さん？ すいませんが至急ホールに来てくれませんか？」

「やっぱり勝負するのか。わかったとりあえずそっちに向かうよ。」

「ありがとうございます」電話を切り至急とりかかる。

打つのはマジハロの推定4

今日は4ぽい台が2、3台あり他は設定2といったところか。

A R T突入率で6をごまかそうというのが見え見えである。

九条さんは赤ドンを打ってもらっている。

最高設定Hはないみたいだが6ぽい台はいくつかあった。

何台かはまだプレイ中の客を見かけたが6候補台が一台空いたから早速作戦に取り掛かった。

時刻は現在午後5時ちょっと前。閉店まで6時間弱あり4000Gは回せそうだ。

コレだけあればもしかしたらリンかけの6に肉迫できるかもしれない。

ほどなく三宅さんが到着しマジハロの4ぽい台を打ってもらった。

コレはある意味保険だが勝つ確率は格段にあがるはずだ。

そうこうしているうちにあつという間に閉店時間だ。

「九条さん、どうでした？」

「あれはまあ、6でいいだろ。ビタ金でたしな。そっちはどうだ？」

「三宅さんのおかげでなんとかまりました。」

「そうか、昇流ありがとな」

「気にするな。タダでアリスたんを堪能できてわりと満足だし」

「このオタクが・・・」九条さんがぼそっといった。

あのさわやかな三宅さんが実はオタク系？

ちょっとショックだな。アリスたんとかいつてたしな・・・
僕たちはいったん他のお客さんと一緒に退店した後に裏口から入店
という手はずになっている。

午後11時過ぎ、店長に招き入れられて中へ。

「おや、昨日のマスターも一緒に？」

「ええ、立会人といったら大げさですがいちスロ好きとして拝見させて下さい。邪魔はしませんから」

「ま、いいだろう。勝負は2対2で差枚数の多いほうが勝ちでいいな？」

「いいですよ」

だんだんと緊張してきた。しかし九条さんは相変わらず感情を表に出さない人だ。

「コインはうちの店員に言えば1000枚ずつ渡す手筈だ。でその分あとから引く。」

「わかりました。台選びは？」

「同時に入店したのち好きな台に着手し朝7時まで。台移動は好きにしたまえ」

かなり自信満々だ。

「それではしばらく閉店作業があるためレストルームでゆっくりしててくれ。」

俺たちはレストルームに移動し作戦の最終確認をした。

自販機で缶コーヒー買いそれを飲みつつ会話をした。

「かなり自信満々でしたね」

「他のハイスぺ機種に最高設定がなかったからまず間違いなくリンかけの6で勝負してくるだろう。300万あればリンかけの赤字分は楽に回収できるだろうしな」

「実際どうなの？あれで何とかなるの？」三宅さんはわりと心配してくれているみたいだ。

やけに落ち着いた様子の九条さんが「ま、大丈夫だろ」と答える。

「それよりお前店のほうは？」

「こんな勝負めつたに見れないだろうし臨時休業にしてきたよ」

妙に明るい口調だ。三宅さんもやはり大がつくスロばかみたいだ。

そんな他愛もない会話をしてるともう勝負開始10分前だ。

大丈夫、きつと勝てると強く念じた。

そして勝負が開始された・・・

第七話

（絶技発動）

入店と同時に店長と佐藤と呼ばれた男はリンかけの島に向かった。俺たちはとりあえずやつらがどの台に座るか確認のためリンかけの島に向かった。

店長が座った台は7000GちょっとでBIG29MID14で8000枚くらい出た台だ。

これはもう6でいいとは思っていた。

もう一人、佐藤という男が座った台は5500GほどでBIG16MID9で3000枚弱という台だ。

他に出てた台もあったが自信満々に座っているのだから6なのだろう。

「ここまでは思ったとおりだな」

そういうと九条さんはリンかけの島の裏の島、つまり赤ドンの島へと向かった。

そしてコインを受け取りまわし始める。

それを見届けないうちに俺もマジハコの島へむかい閉店前に打っていたいを打つ。

九条さんの台は閉店前に6000Gほど回していたからこの1000枚で天井に届くだろう。

そう思ってたまわしていると程なくしてスイカから同時当選でBIGをGET！

低確状態だったが問題ない。

BIG中にART確定演出が出現しART突入した。

それを見てた店員の一人がどこかに、といったもたぶん店長のところに向かったのだろう。

何でも店長いわくお互いに不正を働かせないために2人ほどフロアにもうけているらしい。

もっとも完全な店長側の人間だろうが。

大方BIGをひいたりART突入するたびに報告するように言われているのだろう。

そしてBIG終了後ART突入した。

その直後くらいに九条さんもBIGをひいていた。

BGMのない店内だから誰かがBIGをひけば音でわかる。

BIG終了後に、程なくしてドンちゃんゲームと店内に響き渡った。しかしリンかけも2人累計でBIG3回MID1回引いてる。

勝負開始からまだ30分もたつてないがやはり6は別格みたいだ。

そしてART消化中、見張り役の店員が異変に気づいたらしい。

そうARTが50G、100Gをすぎても終わらない。

しかしまだ店長に報告にいかないのは下っ端ゆえだろうか。

そしてART中にBIGをまた引きART上乘せに成功。

いい感じでボーナスとARTがループし開始一時間でBIG3REGOで約1000枚のコインを確保、最初に渡されたコインとあわせて1700枚くらいか。

九条さんもARTちゅうにBIGをひいたみたいだ。

これで九条さんも1000枚近くあるだろう。

リンかけは確率どおりひいているため2人とも7〜800枚ずつとあった感じだ。

ここで俺たちが何をしたかを説明しよう。

マジハロで俺と三宅さんがしたことはARTをとにかく最短で終わらせること。

つまりわざとARTをパンクさせたのだ。

このマジハロはARTが途中でパンクすると残りのARTゲーム数を次のボーナス当選時から続きをできるというシステムがあるのだ。

A R T突入率の高い設定4でパンクをさせ続けたならかなりのA R Tゲーム数が残っているだろう。

マジハ口の4と6の大きな違いはA R T突入率くらいなものでボーナス確率も一緒だしA R T状態なら設定は関係ない。

A R T状態だけを打てばリンかけの6と同じかそれ以上の出玉を有せるだろうという考えだ。

もちろん九条さんは赤ドンでナビポイントをできるだけ使わずにパンクさせたのだ。

赤ドンもA R T突入のナビポイントを残しておけるため大量に残すという作戦だったのだ。

そうすれば2人とも初当たりからしばらく、下手すると上乘せの連発で時間いっぱいA R Tとボーナスのループもありえるだろう。

三宅さんにA R Tを残してもらったのは途中どちらかがA R Tが終了したときのための保険代わりだ。

店長はリンかけの6×2でつぶしにきたようだがそのほかのハイスペ機種にも中、高設定を入れたのが運のつきだ。

もつともイベント上仕方がなかったのかも知れないのだけどな。

勝負開始から3時間以上過ぎようやく折り返したところで店長が異変に気づく。

「な、なんで奴らがあんなに出玉を・・・」

トイレにいった帰りにたまたま様子を見に来たらしいが気づくのが遅すぎた。

「お、おい！ちゃんとみはっていたのか!？」

下っ端の店員を問い詰める。

が時すでに遅し。

マジハ口は3時間ちよつとでB I G 1 6 R E G 1 0でA R Tがやつとおわり6 0 0 0枚以上出玉がある。

初当たり以降ずっとA R Tとボーナスのループだからコレくらいの出玉はむしろ必然である。

九条さんもARTが60連以上している上BIGを12回引いている。出玉は5000枚以上か。

「な、なんでそんなに出玉があるんだ!!?」

店長の怒声にも似た叫びが響く。

九条さんはゆっくりとタバコに火をつけフーッと煙を吐く。そして

「昨日の俺たちの立ち回りを見てないのか?」と言った。

「い、いや、いろいろ忙しかったから店内にいることくらいしか・
」

「やっぱりな。俺たちは店長が設定据え置きで勝負するて言うから仕込ませてもらったのさ」とARTを消化しながら説明する。

頼むから目押しミスらないでくださいね?九条さん。

「俺たちは台の特徴をいかした立ち回りをしたまでだ。赤ドンでARTを即パンクさせたりマジハ口のARTを即パンクさせたりしてたんだ。据え置きつてのがなきやこうはいかなかったかもな」

「おかげで昨日は大負けだよ。ま、この勝負に勝つためだから仕方ないんだけどね。ちなみにこの作戦考えたの俺だから」といいながらBIGを揃える。

「いいのかい?ぼさつとたつて。リンかけまわさなきや勝てる勝負も勝てなくなるよ?」

そう九条さんがいい終わる前に店長は急いでリンかけに戻った。

が勝負はほぼ決まっていた。

九条さんはほどなくナビポイントが切れART終了。

しかしまだマジハ口がもう一台残っている。

俺の台もARTが終了したが、純Aタイプはほぼ全台が低設定だしマジハ口の4なら機会割が100%を越えているのでこのまま続行した。

現在午前5時40分、俺たちチームは約14000枚。ARTが終わらないすごさを改めて確認した。

一方リンかけチームはBIG30MID11と好調ではあるが2人合わせて約7000枚とダブルスコアだ。

もはや勝負はついただろう。

午前7時。勝負が終了した。

俺たちチームでの差枚数は+15895枚

店長のチームは後半追い上げたが差枚数+8567枚

大差で勝利した。

「店長、約束どおり裏スロットの店を教えてもらうぞ」

「リンかけの6で勝てないとはな。まさかARTを仕込んでくるなんておもいもしなかったよ。仕方がない。私の負けだ。今日はもう疲れたし仕事もあるから明日の夜、今から約40時間後の閉店した後にこの店に来てくれないか？」

「わかった。おい朝倉、いったん帰るぞ」

「ふぁー俺めちやくちや眠いつす」おもわずあくびが出る。それに九条さんもつられる形であくびが出る。

なんせもう17時間以上起きてる上ほぼずっとスロットを打っていたのだから疲労はピークだろう。

「ん？あれ？昇流はどこいった？」

「んーと、あれじゃないですか？」

よくみると店内でドリスタを打っている。

ちよつと怒り気味で九条さんが「お前何してんの？」と声をかけた。

「ああ、君たちの勝ちをほぼ確信したからドリスタを打ってたんだ。ただでまわせると思うと楽しいよねー」とものすごい満面の笑みでこたえる三宅さん。

「お前は立会人だったはずだろ？」

「まあまあ、君たちが勝ったんだからいいじゃないか。ハハハ」笑ってこまかそうというのが目に見えてる。

「2人ともとつと帰りますよ」

「え？もう？もうちよつと楽しみたかったのにな」ものすごく残念そうだ。

初めて逢ったときのさわやかな印象はとうに薄れてしまった気がする。

「じゃ、店長また明日の夜に会いましょう」九条さんがそういつてその場を離れた。

「ああ、わかつているよ。とんだ災難だ」悔しそうに言う店長を背に俺たちは勝利を堪能した。

そして帰宅後ものすごい疲労感ですぐに寝たんだ。

久しぶりに快眠ができそうな気分だ。

第七話（後書き）

なんか間違いがあったら指摘してくださいね。

第八話

（紹介）

夜10時過ぎに九条さんと車を走らせる。

向かう先はもちろん例のパチンコ屋の店長のところ。

「九条さん、きいていいですか？」

「なんだ？」

「裏スロなんてしよせんやくざが取り仕切っているようなところでしよう？」

「ああ、たぶんな」

「危険もでかいじゃないですか。なんでそこまでして裏スロにこだわるんですか？」

「もちろん金のためだ。手っ取り早く金を手にする為にはもってこいだろう？」

「そうですね・・・」

しばし沈黙が続く。

が九条さんが口を開く。

「もしかしたらつかまるかも知れない。けどその程度のリスクを背負えなきゃ大金はつかめないんじゃないかと俺は思うぜ」

俺はどっちつかずの気持ちで、自分はどうしたらいいか考えているうちに到着した。

時刻は10時45分。

少し早くつきすぎたみたいだ。

車の中にはタバコの煙だけが動いている。

しばらくするとコンコンと窓をたたく音が聞こえる。それと同時に店長が顔を出す。

「すみませんが私の車で移動したいと思うので乗り換えて下さい」
わかったと伝え車を降る。

戻るなら今のうちだ。

大金がつかめるかもしれない。

その葛藤を抱きながらも車に乗ってしまった。

もう後戻りはできないかもしれない。

「で、店長、あとどれくらいかかるんだ？」

「そうあわてないで。すぐきますんで。あと私は佐々岡といいます。裏スロの店内では店長ということは内密に。」

「ふーん」と九条さんはそっけない返事してる。

やはり素性をしられるとやばいのだろうか？

車はでかい通りに出てしばらく走る。

この市で一番栄えているところで一番でかい駅やホテルなどもある通りだ。

その中でもトップクラスにでかいホテル「スターライトホテル」に車が向かっていった。

「おいおい店、佐々岡さん。どこに向かってるんだ？」とあわてて聞く九条さん。

「もうすぐ到着ですよ」

といってもここはホテルの駐車場。

そこで車が止まった。

「さ、ついてきてください」

わけがわからぬまま、なすがままとりあえずついていくことしかできない。

そして堂々とロビーに向かう佐々岡さん。

「九条さん、どう思います？」

小声で聞いてみるが

「さあね」と至極当たり前な返事が返ってくる。

たしかに俺たちは現状をつかみきれていない。

「1280号室を予約していた佐々岡です」

予約の確認をする佐々岡さん。

そして奥から支配人らしき人が出てきて案内される。

「どうぞこちらへ」

相変わらずどこへいくのかが見当もつかないが仕方なしについていく。

エレベータを使い、しばし歩いて案内された部屋はふつうの部屋だった。

「佐々岡様、今日は遊んでいかれますか？」

部屋に着くやいなや支配人が口を開く。

「いや、今日はもう時間がないし、こちらの2人を紹介したいだけなんだ」

「そうですか。では当店のシステムをご説明してもよろしいでしょうか？」

なかば流されつつも俺たちは承諾する。

「当店は紹介制のカジノ、といってもオーナーの趣味でスロットしか置いておりません。基本コイン一枚100円と同等の価値があります。が日にちによつては価値が変動します。」

それを聞いて俺は「100円と同等の価値？価値が変動するってどういうことですか？」ときいてみた。

「はい。当店は裏スロットを専門としてますが店に現金を置いたりすれば違法行為です。がここで行われているのはオーナーの友達による親睦会です。その親睦会でスロットを扱っているのです。そして私たちは誰に何枚コインを渡したか、誰が何枚プラスになったかが判るようになってます。そしてその価値に見合った商品をお渡します。あとはお客様が換金しようがしまいが私たちは一切ノータッチというシステムです。」

「な、なるほど」ちよつと難しくなってきたぞ。

「そしてオーナーが決めたイベント日にはコイン一枚200円分の価値が出た日も過去にはあります」

説明を聞く限りではそんじょそこのアングラカジノや裏スロに比べ抜け道を用意してるみたいでひとまず安心して打てそうだ。

「えっと、営業時間は？」

「説明します。当店は基本的に朝の9時から深夜3時までの18時間営業です。イベントによっては多少前後しますが。他に質問は？」
「ずっと何かを考えていたような九条さんが口を開く。」

「機種のラインナップを教えてください。」

「当店では現在はオーナーの趣向で5号機オンリーです。ジャグラーEX、ラブリィ、7、ジャンキーが各5台、エヴァ、リンかけ、青、赤ドン、吉宗、北斗の拳将、2027、戦国無双、哲也、ルパン、ガンダムが各10台、バラエティが20台、計150台です。」

「なかなかいいラインナップだな。明日からすぐ打てるのか？」

九条さんも納得したのかやる気まんまんだ。

しかし「いいえ。」と支配人は言う。

「まだ何かあるのか!？」

「はい、佐々岡様は久しぶりのご来店で当店のルールが変わったのをご存知ありませんでした。その変更点をお伝えします。当店は3ヶ月前からチーム戦とされています。1チーム最低で4、最高でも5人として36チームまで。コレで遊んでもらいます。つまりお客様方は今3人なので御遊戯できません。」

「さつき遊んでいくのかどうかきいたのはなぜなんだ？」佐々岡さんがたずねる。

「それは佐々岡様が遊ぶとおっしゃったらさきにこの説明をするつもりでした。が紹介ということで後回しにさせていただいたわけです。」

「なるほど。他に言い忘れないか？」九条さんがしゃべる。

「では、続きを。1チームの参加登録として1チームメンバー数かける300万ご用意していただきます。コレは表向きにはホテルの宿泊費としていただきます。参加登録をしていただいたお客様には1年間ホテルをご自由に使える権利があります。このあたりの説明は登録時に詳しくさせていただきます。それとご登録していただいたチームが御遊戯なさるときはチーム全員でフロアに入場していただきチーム全員で退出していただきます。コレは参加登録だけして

フロアに来なくなる幽霊会員をなくし稼働を上げるためです。一般参加がないためフロアには常に少人数しかいません。ですので幽霊会員がいますとさらに稼働が落ちるのでこういうルールを設けておきます。そしてメンバーにかならず女性を最低でも1人は入れること。しかし女性だけのチームも認めておりません。チームの重複も認めておりません。急ぎ足でしたが以上です。何か質問はありませんか？」

しばらく思案し九条さんが「いや、とりあえず大丈夫だ。」と答えた。こういうことは九条さんにまかそう。

「そうですか。今日の宿泊は無料となっておりますのでご自由にどうぞ」

素晴らしい支配人は下がった。

「さてあと2人どうするかな。」そこが悩みどころでもある。

「わ、私は仕事があるため頻繁にこれないからメンバーにはなれないぞ！」

「わかってますよ。とりあえず状況を整理しよう。佐々岡さんを抜かすと俺らは2人。ほぼ毎日スロット打てる女性と男性を最低1人ずつみつけかつ1200万ないし1500万円用意する。」

こうして考えると過酷な条件である。

「厳しい条件だな。誰か朝倉の知り合いにいい人いないか？」

「いませんね。スロットできるやつはだいたい就職してますし。九条さんのほうは？」

「俺もあてはない。仕方ない。スカウトするしかないか・・・」

しかしスカウトでそうそう集まるものとも思えないが・・・

俺たちはいろいろ話し合っているうちに遅くなったため今日はこのホテルに泊まることにした。

そして次の日の昼、佐々岡さんの車に乗りホールに戻った。

「それじゃ、気をつけてな」

「あ、佐々岡さんちよっと待ってください」九条さんが呼び止める。

「ご紹介有難うございました。少ないですがコレを受け取って下さい」といい何か手渡す。

大方想像はつくが。

「すまん。」

そういうと店長は店の中に入っていった。

「いったいいくら包んだんですか？」気になったので聞いてみた。

「50ほど。」あっさり言うがかなりの大金だ。

「なんであんなやつに？」

「あいつは金で動くタイプだ。もしここで金を渡し気持ちよくさせておけばいつか違う形で利用できるかも知れないからな。」

「そこまでは考えてなかったな。」

「ま、すべたがうまくいけばはした金になるさ。とりあえずこのホールからメンバーになれそうなやつを探すぞ！」

「わかりました。」

スカウトでそう簡単に見つかるとは思っちゃいないが探さなきゃならないのも事実だ。

手始めにマイホの客をスカウトしようと思ったが目押しすらママならない客やご年配ばかりなので次のホールに移動することにした。

第九話

（三人目）

条件1 ある程度の目押し力、知識はある

条件2 時間がとれそうな人

条件3 彼女、彼氏のいなそうなひと

条件4 ヒキの強そうな人

これが九条さんがだした条件

コレに当てはまる人というのは正直少ない。

朝一から一人でできてる女性なんてめったにいないし、知識と目押し力を兼ね揃えた女性は珍しいし、彼氏彼女のいる人を長期間つれだすのも難しい。

こうして考えるとこの条件は厳しすぎる。

とりあえず条件に当てはまりそうな人がいたら近くに着席して技術を見る。

合格ラインなら声をかけてみる。

しかし、というかやつぱり条件1と2のどちらもあてはまる人などそうそうみつからない。

「しかたない、次のホールにいくか・・・」

しぶしぶ九条さんがそういう。

これで何件目のホール移動だろうか。

条件に当てはまる人が見つかるまで市内のホールをまわるつもりらしい。

20分後、違う区に入りすぐのホールに到着。

時間は昼の12時をちょっとすぎたくらいだ。

「九条さん、先にめしにしません？」

「じゃ、このホール見たあとな」

朝から何も食べてないからお腹が減って仕方ない。

もうちょっと我慢するか・・・

そんなことを思いながらホールを回る。

この時間帯にはなかなか客付きはいいホールだ。

しかし目押しのできないおじちゃんおばちゃん層がカップルか学生か、そんなのばかりでなかなか条件にあった人が見つからない。

そんな中、戦国無双の島で一人箱を積む女性がいた。

横に彼氏らしき人はいない。

とりあえず様子見で横の台に着席し台情報を見ながら観察する。

「おい、朝倉そっちはどうだ？」

「あ、悪くはないですよ。BG後にしっかり無限はいつてますし」

「台のことじゃなくて・・・」

「わかってますよ。とりあえず横の女を観察してますよ」

「じゃ、なんかあったら連絡くれよ」

打ちながら観察する。

DDTは中押しチェリー狙いとなかなか難しいところを狙っている。

評価＋1だ。

お、チェリーをひいて高確にあがったみたいだ。

それをしっかりカウントしている。

評価＋2だ。

特殊リプレイひいたみたいだ。

引きも悪くない。

評価＋3だ。

コレがボーナスにつながる。

BIG中の2択もかなり正解している。

評価＋4だ。

そうこうしているうちに俺もボーナスを引く。

低確BGだったが勝利し無限に突入。

やはり高設定くさい。

そんな時

隣の女性の携帯がなり電話にでるため外に走ったみたいだ。

とりあえず彼女に気づかれないうちに後をつけて話をきいてみる。

もし彼氏からの電話ならその時点で評価 - 10 だ。

しかしこれじゃ半分ストーリーカーだな。

そんなことを思いながら聞き耳をたてていると案の定彼氏からの電話みたいだ。

しかしよくよく話を聞くとどうやら彼女は別れたつもりだが彼氏があきらめきれないらしい。

しかも彼女は絶対によりを戻す気はないみたいだ。

そんな話を聞いてしばらくしたとき

「おい朝倉、なにやってるんだ」

九条さんがきた。

「なんかあつたんですか？」

「なんかつて、お前の台呼び出し食らってたぞ。あとあの女も」

「マジッすか？」

と、時計を見たらもうあれから45分以上たっている。

「じゃ、俺はとりあえず戻りますね」

と走り出そうとしたとき

「まあ、まて朝倉」

「な、なんすか？」

「あの女、今誰と話をしてるんだ？」

「話の流れからしたら元彼みたいですけど、彼女はよりを戻す気はないけど彼氏がしつこい。そんな感じですね」

「で、かれこれ45分以上たっていると」

「そうですね。じゃ、俺はもう戻りますよ」

そういつつ俺はダッシュで戻った。

まだ電話を終わらなそうな彼女をみて九条もホールへ戻った。

何とか台は一般開放されずにいた。

「あつぶねえ、ぎりぎり」

そういつつRTを消化していると

横の台、彼女の台を撤去しに店員がきた。

それと同時に九条さんが

「すみません、打ちますから」

と店員に話をしている。

なんとか謝りながら、彼氏だからと嘘をつきつつ台に着席した。

「九条さんどういっつもりですか？」

「ああ、あの女どうもよりを戻す気は一切ないみたいだからうまく行けば俺らの仲間にできるかもしれないだろう？ならここで恩をうっておいてあとで話くらいは聞いてもらおうかと思つてな」

「あ、なるほど」

「それに見た感じDDTしてたし悪くはないだろう？」

「よく考えてますね」

そんな会話をしつつRTを消化し、1時間ちよつとがたつたころ

「おい、朝倉、お前横からみててこの台どう思った？」

「台ですか？チェリーから高確にあがつてましたし無限にも入ってましたし、まだ短時間しかみてないけど悪くはない印象でしたよ」

「今チェリーから高確移行率が0/7だぜ？」

「マジッすか？」

「まだ7回くらいじゃなんともいえないが1/2を7連続スルすか？」

「ヒキのいい女なんですかね？」

「もしそうなら評価+5だな」

そんな会話をしていると

「ちよつとお兄さん！その台私の台なんだけど！」

威勢のいい声と同時にあの女が戻ってきた。

「お嬢さん、あなたこの台を2時間近く離れていたんだよ？」

とやさしい口調の九条さん。

その台詞で時計を見た女性

「ご、ごめんなさい。もしかして撤去された後に座られた方ですか？」

「ん、ちょっと違うかな？お嬢さんが戻ってこないから彼氏と偽ってこの台を打っていただけだし」

「え？どういうこと？」

状況がいまいち飲み込めないみたいだ。

「つまりこのコインはお嬢さんのものということ」

「ええと、ありがとう？」

どうやら困惑しているみたいだ。

「お礼はいいので、その代わりといってはなんですが今日これからお時間いただけませんか？」

「う、うん。いいですけど」

「それはよかった。まだこの台打っていきますか？それなら僕たちは終わるまで待ってますし」

九条さんて紳士口調が意外に似合うことにきづいた。

「え、いや、低設定くさいんでやめますよ。ていうか、僕たち？」

「あ、あなたで横で戦国うつっているこの男と仲間なんです」

「よろしく」

と2人で挨拶をする。

しかし低設定を見抜いていたことよりもその低設定台で2000枚近く出したことのほうが驚きだ。

ヒキはかなりいいみたいだ。

「よし、そうと決まれば飯にいくぞ！朝倉、早く終われ！」

「ちょっと急がせないでくださいよ！今無限RTなんですから」

「勝ってるんだろ？なら放置プレイすれ！」

「いやですよ！」

「じゃ、パンクさせろ！ていうかさせる！」

といって勝手にストップボタンを押す九条さん。

それと同時にRTが終了・・・

「俺の無限がー！！」

「どんまい、よくあるよくある」

この悲しい気持ちのまま居酒屋に行くことになった。
もちろんプラスで終わった俺のおごりで・・・

第十話

く 出会いの形く

カランカラン

入店と同時に「いらっしやいませー」と気持ちのいい挨拶。

そしてまだ陽は沈みきつてない時間帯にもかかわらずそれなりに喧騒している。

「九条さん、なんで居酒屋なんですか？それにまだ6時ですよ？」

「腹減ってるしなんか呑みたい気分だったからさ。」

「それなら昇流さんのところでもいいじゃないですか。」

「あいつのところはここから遠いしさ。それに、この女性、ええと・

・・」

「あ、私は朝比奈奈々子ていいいます」

「ななこちゃんが住んでるところに近いほうがいいかなって思って」
絶対嘘だ。

俺たちはホールを出た後食事に行くという約束のため車を走らせた
がものの10分もしないうちに九条さんが車を止めここにしようと
居酒屋をチョイスした次第だ。

「いらっさーせー飲み物は何になさいますか？」元気のいい店員だ。

「とりあえず生3つ」と勝手に注文する。

「ちよつと九条さん、車どうするんですか！？」

「運転しなきゃいいだろ」

さらつと車の中で寝泊りする宣言されたわけだ。

「はい、おまちです。」

「とりあえず乾杯といこう」もはや九条さんのテンションが高い。

「何にですか？」と、ちよつと水をさしてみる。

「そんなの奈々子ちゃんとの出会いに決まっているだろう！」
「なんで俺が怒られたような雰囲気なんですか？」

「それじゃ、気を取り直して、奈々子ちゃんにがんばーい！」

「「がんばーい！」」

と同時に一気に飲み干す九条さん。

でも酔っ払っ前に本題に入るあたりさすがというか抜け目がないというか・・・

「で、早速ですが奈々子ちゃん」

「はい」元気のいい返事だ。

「いろいろ聞かしてもらおうよ。ということであとは朝倉。おまえに任せた。」と九条さんがいう。

「え？俺が！？しかたないな・・・」あまり乗り気ではないがいくつか質問してみる。

「いきなり込み入った質問するけど、奈々子ちゃん今彼氏いますか？」と聞く。

「え？お話ってナンパなんですか？」

うん、いきなりそこから聞いたら誰だってそう思うよね。

「ええと、じゃ違う質問、俺たちと大金稼ぐ気はないかい？」

「ええと、AVならお断りです・・・」

うーん、さてどう切り出したらいいものか？

「九条さん、核心ついちゃってもいいですか？」

「いいんじゃないの？あ、おにいさん生3つ」酒が入るとけっこう適当な人になるな。

許可が下りたことだし俺はこの前起こったこと、俺たちのことを1から説明することにした。

く 小一時間後く

「それで私に声をかけたわけね」

どうやら納得してもらえたようだ。

「うーんと、私でよかったらお願いします、でいいのかな」

なんか思春期のカップルの誕生のような気分だ。

「よろしくね。」と改めて挨拶する。

「よろしく」九条さんはすでに大量の酒を飲んでもかかわらず

口調がしつかりしている。

「あの、それで私からも質問していいですか？」

「ああ、なんなりどうぞ」

「お二人の名前教えてもらってもいいですか？」

「ああ、そういえば自己紹介してなかったね」出会ってから2時間以上自己紹介しない俺たちも俺たちだが・・・

「俺は朝倉秀行、でこっちが・・・」

「九条光です。よろしくね奈々子ちゃん」そういつてさりげなく手を出し握手する。

「あ、はい、こちらこそ改めてよろしくお願いします」

「そういえば奈々子ちゃん、俺らのチームに加わってもらうのは歓迎なんだけど、仕事や彼氏とかその辺は大丈夫なの？」と聞く九条さん。俺も気になっていたことだ。

「あ、はい大丈夫です。」

「今日電話していたのは彼氏じゃなかったの？」と交互に質問する。「ええと、あの電話は元彼からだったんです。あのう、ちょっと私のお話聞いてもらえますか？」

「ああ、いいよ」と承諾したのはいいが、奈々子ちゃんもしかして酔っているのか？

ちよつと目がすわっている気がする。

「私ね、大学出てすぐに友達の紹介でキャバ嬢してたんですよ。他に仕事もなかったし、上にいければ儲かるってきいてたしちよつと興味本位で。で、そのとき例の元彼と出会っちゃったんだ。最初はお客としてだったんだけどいつも私を口説こうとして、プレゼントもってきてくれて、それがすごくうれしくてアフターしたり同伴したりしてたんだけど、気づいたら一緒に住むようになってたんだ。スロットはその時彼に教えてもらったの。」

うんうん、とうなずくことくらいしかできない。それほど俺も九条さんも聞き入っている。

「で、半月分の給料くらいの額を勝ったりしているうちにすっかり

スロットにハマっていたみたい。そしてキャバ嬢も板についてきた去年、彼とずっと一緒にいたくても店をやめちゃったの。もちろん指名も増えてきた時期だし引き止められたけど彼も有名なIT企業に勤めているらしく食うには困らせないって言ってくれたからやめる決心がついたの。でもね、全部嘘だったの・・・」

一瞬悲しげな表情をみせる。

「IT企業も嘘、食うに困らせないも嘘、借金ばかりで首も回らないような人だったの。それでも根はいい人だと思いたかった。でね、そんなあるときふと私の貯金通帳みたら残金が0だったの。それだけじゃなく彼、私名義で借金して、しかも彼が女を連れて歩いていくところを目撃したの。百年の恋も一瞬で冷めるって感じかな。なんでこんな男に惚れたのかもわからないって思って、さようならの置手紙をして別れたの。それが先月。だから今は仕事もしてないし彼氏もいないし借金もあるからこの話をOKしたの・・・」重い話だが明るく振舞おうとしている姿が健気だ。

「そうだったのか・・・」

「大変だったんだね・・・」

2人してそんな言葉しか浮かばなかった。

話題も変えたかったので「それはそうと、なんで彼から電話かってくるの？いやなら着信拒否すればいいじゃない？」と当たり前質問をぶつけてみる。

「え、えと、私機械の操作が苦手で着信拒否とかやり方わからないし、機種も変更したばかりだし・・・」恥ずかしいのかお酒のせいかわからないが顔が赤い。

「それじゃ、やってあげるよ。携帯かして」といって着信拒否設定をしてあげた。

同じメーカーの携帯だったため操作は簡単だった。

「ついでに俺と九条さんの番号とアドレスもいれておいたから」

「あ、ありがとうございます」満面の笑みだ。

「よし、問題が解決したところで呑むぞ！」

「あんたはさつきからどんだけ呑んでるんだよ！」

気づいたらピッチャーが空になっている。いつ頼みいつ飲み干したのかもわからない。

「まあまあこんなに早く見つかるとは思わなかったし、あと一人にまでこぎつけたんだからそのお祝いということで」といいながら日本酒を頼む。仕方ないのでとことん付き合う。

「あ、ねえ、あと一人は男女どちらでもいいんですよね？」

「ん、そうだけど、誰か奈々子ちゃんの知り合いにいそう？」

「知り合いってほどじゃないですけど、もしかしたらみたいない心当たりはありますよ」

「よし！明日はそいつを探しにいくぞ！」

「それじゃすみませんが私はこれで帰りますね。明日また連絡しますので。」気づいたらもう10時過ぎだ。

「朝倉、俺らはまだ飲むぞ！」

「はいはい。それじゃ、奈々子ちゃんまた明日ね。」

「気をつけて。」

そう別れを告げて九条さんに付き合い酒を呑んでいたら閉店の深夜2時まで付き合わされた。

天気の良い夜、居酒屋の駐車場の車の中で朝を迎えることになった。

第十一話

（対峙）

コンコン！

窓をノックする音で俺は目が覚めた。

「おはよう。てもうお昼だけどね」

奈々子ちゃんだ。

おはようと挨拶をする。九条さんはまだ寝てるみたいだ。

そりゃ、昨日あれだけ飲めばそうだろう。

とりあえず九条さんを起した。

「おはよう。で、なに？」

「ほら、昨日話した人のところにこれから行くんじゃないですか」

「・・・ああ・・・」

ものすごく寝ぼけているみたいだ。

とりあえずコンビニで顔でも洗おうという話になった。

そして目的の人がいるホールへ車を走らす。

もちろん寝ぼけている九条さんに運転は任せられないので俺の運転で。

「で、奈々子ちゃん、その人とうして知り合いなの？」と九条さんがタバコをすいながら聞く。やっと調子出てきたみたいだ。

「えつとですね、例の彼氏と別れたときに、いつも行っていたホールじゃ彼にあう可能性があるのですよ。さげなホール探していたんですよ。その時たまたまよったホールでその人に会ったんですよ。」

「ふーん、でうまいの？」

「ちよつとだけ会話したんですがなんでもお金が必要でスロット打っているらしいです。そのため遊び打ちや無駄にコインロスすることない打ち方していました。だから今回の話は彼にもうってつけかなとおもって」

「なるほど。じゃ、ホール着いたら起して。また寝るわ。」

そういうと本当に寝だした九条さん。さっきコンビニで買った栄養剤がまるで意味を成してない。

しばらく車を走らす。

「ここ左でしばらく行けばパチ屋の看板が見えてくるはずです。そこでお願いします」

車で30分少々（居酒屋から）走ったところにあるホールだ。

「奈々子ちゃんは今なところまでどうやってきたの？」

「あ、近くに駅があるんですよ。そこから歩いて20分くらいなので」

「で、優良店なの？」

「まあ、どこにでもあるホールで感じですよ。イベントでは高設定使ってます。程度の」

「なるほど。と、九条さん！つきましたよ！」掛け声とともに車を止める。

「・・・ああ・・・」相変わらず眠たそうだ。

「それじゃ、私ちよつとホール内を見えます。もしいたら連絡するのでレストルームにでもいてくださいね」

「わかった」というと同時にレストルームに向かう九条さん。その九条さんにちよつとぐるつと見てきますと伝えホール内へ向かう。

何でも店内のイベント案内表によると今日は月1のイベント日らしい。

何台かしつかり高設定をいれあとは下ばかりという典型的メリハリ営業だ。

そうこうしていると奈々子ちゃんから「発見！！」とだけ書かれたメールが来たのでレストルームへ戻ってみる。

「あ、きたきた。ターゲット発見しました！」

「で、何打ってたの？」

「キンニクマンの真ん中あたりの台です。もう2箱くらいある人ですよ。」

「よしとりあえず見に行くか！」といいながら九条さんがタバコの火を消し立ち上がる。

「ほう、あいつか。けっこう若いな。お、小役力ウントもしているな。」

「ですね。」

「いや、二人とも影からこっそりみたいな覗き方しないで堂々と見ようよ。」

「それもそうですね。」ハハハと苦笑いする2人。

「で、朝倉、なんて声をかける？」とふられる。

「てか奈々子ちゃんが顔見知りなら話をできるように取りなつてもらえばいいでしょ？」

「とりあえず、当って砕ける作戦か。まあ、いい、いくぞ」といいながら先陣を切っていく。

この思い切りのいい行動力は俺も見習うべきだろうか・・・

「あ、あの～」と奈々子ちゃんが声をかける。

「ん？何か用・・・て、この前のお姉さんか。どうしたの？」

第一印象は、わりと人懐っこいような青年だ。

「あのね、私の友達がお話があるっていうんだけど、聞いてもらえらる？」

「え？いいですよ。合コンかなんかです・・・か・・・」

「どうも。」

あ、今九条さんと俺を見て露骨にいやな顔をしたぞ。

「・・・なんか用すか？」

おっと、言葉使いが露骨に悪くなったぞ。

「俺たちはとあるホールで乗り打ちをする予定なんだ。それでメンバーをあと一人ないし二人探しているんだが君もどうか、と思つてね」と紳士に対応する九条さん、内心穏やかじゃないだろうに。

「お断りします」即答だ。話すら聞く気がないみたいない口ぶりに聞こえる。

「な、なんでかな？決して損はさせないよ？」と九条さんが何かよ

からぬアクションをおこす前に聞いてみる。

「僕はいまこのホールで十分勝てる状況にあります。たとえこのホールの現状が悪くなっても違うホールでやっていける自信もありますし。」なるほど。

「ふーん。話は変わるがこのキン肉マン、6か？」と聞く九条さん。「そうですね。初あたりで黒7と青7あわせて4回引いて4回MTに入ってますし、ゴングからもMTによく入りますし、まず6ですよ」と、自信たっぷりだ。

「なら、今から俺たち3人と出玉で勝負しないか？キン肉マンの6VSその他で」俺たちに許可なく勝負を吹っかける。

そうとうイラついてるのか、メンバーとして十分な実力ありと見込んだのか。

「僕が勝つたら？」

「迷惑料で1本はらう。でどうだ？その代わりこつちが勝つたら話だけでもじっくり聞いてもらう」

「閉店時に僕の出玉より差枚数で1000枚以上出したら勝ちって条件なら受けますよ。3人いるならそれくらいいいでしょう？」どうやら負ける気はさらさらないようだ。

「ああ、構わないぜ！今の約束忘れんなよ？」

といつつ僕たちは作戦会議に移ることにした。

「ちよつと九条さん、どうするんですか？」

「何が？」

「何が？時間的に3人で6000枚近く、下手したらそれ以上出さなきゃならないんですよ？」

「それはわかってる。が、態度の悪いガキにはお仕置きが必要だろ？」

やっぱイラついてるみたいだ。

ここで計算してみよう。今が午後2時53分、3時スタートとして閉店まで7時間チョイで約5000G回せるとなると割り110%

の機種で約1500枚。コレを三人で4500枚前後となる。

加えてキン肉マンの6を10000Gまわしたとすると割り115%で計算し4500枚となる。

となると5500枚以上必要となるからだ。

しかも勝負は差枚数で決まるとなると投資分込みで6000枚以上必要となるのだ。

「一人2000枚近くとなると、110%の純A台だちょっと厳しいですよねえ、皆さん何打ちます?」

「俺に提案があります」と切り出す。

「なんだ?」

「みんなでARTを打つのはリスクが高いですし、かといってみんなが純A機種ばかりじゃ目標に届かない可能性があります。そこで一撃、安定、確実の3つでそれぞれ立ち回っていたらどうかと思います」

「なるほど。具体的には誰がどれを担当するかだな。どうする?」

「奈々子ちゃんはヒキも強いほうだしART機種で一撃狙い、で九条さんは天井や高確狙いで確実にコインを増やしてもらいます。で、僕は純A機種でしっかりコインを確保。これでどうでしょう?」

「なるほど。なかなかいいんじゃないか?」

「打つ台がないときは臨機応変に天井など確実な台を探して下さい。もちろん高設定を見つけたら閉店までぶん回す。いいですね?」

「わかった」

「おっけいですよ」

「じゃ、解散、みんながんばって」

午後2時58分スタート

第十二話

く立ち回りく

く朝倉秀行の立ち回りく

さて、純Aで固くコインを確保といったが何を打つかな。

これから2000枚近く、ほかの二人がこけたときのことを考えると、もつと出さなきゃならない。そう考えると機械割りが110%くらいは最低でもほしい。

このホールで6で110%を超える純A機種はリングにかけろ、エヴァ、青ドン、ハーレムエース、北斗の拳NZ将くらいか。

しかしバラエティに3台のハーレムは厳しいし、北斗はすでに6つばい台は空いてない。空き台はどれも合算が1前後だ。リングにかけろも一台噴いていてすでに3000枚はあろうかという出玉だ。

エヴァも一人、1箱と下皿の人がいる。

となると、青ドンを開拓するしかない。

イベント内容的には全機種1台は6があるイベントらしいので青ドンで6(H)探しをすることにする。

とりあえずどの台も回ってない状況。仕方がないので空き台でレギュラーボーナス後476Gという台を見つけたのでコレを打ってみる。幸い横に人がいる状態だからその台の挙動もチェックできる。

打ち始めて3000円使ったところで氷から重複でBIGを引いた。しかし花火はねずみ花火、「とりあえず回してみてるか」そう思った矢先に横の台でBIG、しかも3連ドン花火が上がったのだ。

コレを見てしまっではもうこの台は続けられない。

「クソ、もう打つ台が見当たらないな」そう思いつつホールを徘徊した。6つばい台を打っている客がやめないかチェックしてみたが誰もやめそうにない。

仕方がないのでレストルームで休憩をとる。

「やばいぞ、2000枚どころか1000枚すら危うい。いつそジヤグラでも・・・」

その考えていた時、エヴァで高設定ばい台を打っている客がジューズを買いに来た。

人もよさそうなので探りを入れる意味もこめて話しかけてみた。

「お兄さん、エヴァでけっこう出してるひとでしょ。やっぱり6なの？」

「え、いや、どちらかというと5っぱいですよ」最初は戸惑っていたみたいだがいい人みたいだ。会話が成り立つ。

「初当り赤7ひいて次に青7引いたときは6かな、と思ったんですけど、それから赤7しか引かないですし、ベル確率も7、6と5に近いですよ。でボーナスがついてきているから5かなと」

「そうなんですか、有難うございます。がんばって下さいね。」そう挨拶してわかれた。

ここで冷静に考えてみる。

全機種に6はありそうなイベントで下手したら1と間違われる5をなぜ使うか？そして6っぱい台を打っている客がいない。ということとはエヴァに6はまだある？

そう考えながらホールを回ってみてあることに気づく。

「なるほど、そういうことか」

そうつぶやきとある一台のエヴァをチョイスした。時間は午後3時42分。

く朝比奈奈々子の立ち回りく

「ART機種って言ったってなに打てばいいかな」

そうつぶやきつつ機種を調べてみる。

ラインナップはキン肉マン、赤ドン、2027、マジカルハロウィン、戦国無双、マッハGOGOGO、パワフルアドベンチャーだ。

「うーん、キン肉マンの6はあの人が座っているでしょ、マジハロは天井とかないし。うーん・・・」と悩みながらホールを回っていると赤ドンのボーナス後1024Gという台を発見。

即キープしてデータ表示機を見てみるとおもいつきり右肩下がりだ。ということとは天井間近だろう。

「うん、とりあえず打ってみよう」

そう思い打ち始める。投資7000円で天井突入。

しかし即BIGをひきARTの当選はなし。

「・・・あう・・・」チャンスゾーンが終わったところでボーナス確率は800分の1。さすがに高設定じゃないなと思いコインを持ち、うろちよろしていると戦国無双の1100Gという台を見つけ打ち始める。

「よし、今度こそー！」

しかしあつさりコインを飲まれ、追加投資6000円の1521Gでバトルゲームを引いた。

「高確バトルなら無限かなー」などと浮かれていたら、あつさり負けて通常へ。

34Gでまたもバトルゲームを引くもまた負ける。

「さすがに低設定だよね。どうしよう・・・」すでに投資は13000円、手持ちコインは100枚もない。

「天井付近のいい台は見つけるのに結果がついてこないよう・・・」泣きそうな声を出しつつ良台探しをしていると2027でBM間でハマっている台を見つける。

しかもデータ表示機を見てみるとスランプグラフは序盤右肩上がりで今ちよつと失速しているという感じた。

すくなくらず高設定の期待が持てる。

「三度目の正直だよ」

持ちコインを使い切り追加投資6000円で初バトルモードを引く。「やっぱり私ヒキ強い子じゃないよう・・・」

投資19000円、回収した上で目標枚数の2000枚するには約

1800G、90セットだ。

「あう、厳しいな・・・」

「九条光の立ち回り」

「さてと・・・」腰を据えた台はパワフルアドベンチャーの1098Gという台だ。

ステップアップ天井というRTなどには突入しないがARTストックが期待できる天井を搭載している。はまればはまるほどARTの大量ストックが期待できる。

何か良台がないか探している最中に、きっと金が尽きたのだろう目の前で空き台になったので即ゲットしたわけだ。

投資6000円、1207GでBIGゲットしかしART中にボーナスが引けず結局BIG+ARTで増えた分のコイン約500枚をもって移動することにする。

しかし時間も午後4時をちよつと回ったところ。徐々に客が増えてきた程度だ。

まだ空き台に高設定はあるかもしれない、が堅実な天井狙い等で確実にコインを増やさなきゃならない作戦の真っ只中、とりあえず朝倉と作戦会議を試してみる。

「朝倉、どうだ調子は？」

「あ、実はですね・・・で・・・なんですよ・・・もしかしたら・・・」

「へえ、なるほど。それはいいこと聞いたよ。んじやな。」

なかなかやるじゃないか、朝倉は・・・

そう感心しつつ狙い台へ足を運んでみる。

島に着くなり声をかけられる。

「あれ？いいんですか？こんなところちよろしてて？」やってきたのはキン肉マンの島、さっき勧誘した彼のところに来たわけだ。

「ちよつと気になることがあってね」

「僕のコインなら今3000枚くらいですよ、このペースなら閉店

「までで5000枚軽く越えますよ！」自信ありげに言ってくれる。

「そうか・・・」ととくに聞く気もない会話をしているその時、彼の左横の台が空いた。

それをキープしたわけだ。

「一発逆転狙いでキン肉マンですか？」皮肉ってくれる。

「まあな。それにこの台、お前と会った時から一切MTに突入してないんだ。」

「え？・・・それって・・・」

「そう、つまり天井濃厚台だ。さっきのやつがやめた時点で20連続するかしているわけだ」

「で、でもどうせ低設定じゃ・・・」

「この台は5だよ」と話をさえぎるように言い切る。

「な、何でわかる？」

「このホール、6のわかりやすい機種には他に5も使ってるんだよ。6がわかりやすいとどうしても6以外の稼働が落ちてしまう。だから稼働を上げるためにやっているんだろうな。実際キンクマンで出玉アピールするなら6より5を使うホールが多いしさ」

「だからってキン肉マンの1〜5なんて早々わかるもんじゃないだろ！？」

「確かに、でも俺らの仲間の一人、朝倉ってやつが言ったんだ。

『6のわかりやすい機種には5も使ってます。とりわけ並べて入れてくる傾向にありますね。少なくとも今日は』ってな。これなら6以外、とりわけ5とか探すやつは6から離れた台を打つから低設定の稼働が少しはあがるだろうな。誰だって6の横に5が入っていると思わないしな。」

「でも俺の台の右の台かもしれないじゃないか！？」

「ちなみに朝倉はこうも言った。『島の真ん中あたりに入れたがる傾向にありますね』で。お前の台は端から数えて6台目。なら左横のこれしかないじゃないか」

「それでも、まだ勝負に負けたわけじゃない！」

「お、きたぜ」そうこう話しているうちに持ちコインが尽きる前に
やっとなMT突入だ。しかも歌付きというおまけ付きで。

「く……」

「実際、朝倉はすげーよ、このバトルの話が上がった瞬間に作戦立
ててさ、んで店の癖見抜いて高設定見つけて。奈々子ちゃんも奈々
子ちゃんでもヒキがいいね。さっきみたらちゃっかりコイン出してた
よ。俺だけなんのとりえもないんじゃないかな。だから
俺にできることは期待にこたえてやることくらいなんだ。」

そう答えたのが最後に閉店まで2人は言葉を交わすことはなかった。
そして閉店、コイン集計のときが来た。

第十三話

〈結果〉

閉店、そして集計となる。

「集計前に投資額を聞かせてくれ。集計後じゃ瞬時に1000枚差つくように計算されかねないからな。ちなみに俺は投資4000円、200枚だ」

「そうか、俺は6000円で、朝倉、奈々子ちゃん、お前らは？」

「俺は3000円ですよ。」

「わ、私は19000円・・・」

「合わせて28000円、1400枚だな。」

「僕に1000枚差つけなきゃいけないわけですからね。大丈夫ですか？」

「そういつつ集計が始まった。」

この店の箱の大きさ、そしてコインの入れ方からして4500〜5000枚といったところか？

「九条さん、どう見ます？」

「4700枚くらいか、大体割りどおりでたって感じだな」

「勝てそうですか？」

「正直わからない。だってお前らのコインの入れ方が俺と違うからさ。目算ならいい勝負とみてる」

集計結果4762枚、差枚数でいうと4562枚となる。

つまり僕たちは差枚数で5562枚以上、計6962枚以上出さなきゃならない計算だ。

「で、俺たちは誰から集計する？」

「じゃ、俺から行きます」といいコインを集計機に流す。

集計が終わるまで詳細を説明した。

「僕は最初に青ドンをうち高設定ではないと思った後にエヴァの6

探しに行きました。で結果6だと思えます。赤と青に偏ってくれたおかげで・・・」そう言ったところでレシートが出てきた。

「2218枚です。差枚数で2068枚です」午後4時ちょっと前から打ったにしては上出来だ。

「やるじゃん朝倉」

「まあね。」とハイタッチをかます。

「お、集計台にもう一台空きがでたな。じゃ、2人いっぺんに集計と行きますか」

九条さんと奈々子ちゃんが同時に集計と詳細説明を開始してくれた。
「わ、私は赤ドン、そして戦国の天井を渡り歩いて13000円投資で回収がほばない状況になって、そのあと最後に打っていた2027にたどり着きました。追加投資6000円でBMをひきこれが21連。その後に7揃いを2回引きこれらが46連と32連です。取りきつた時点で10時過ぎだったのでやめました。」

しつかり7揃いを引きノルマ近く出しているあたりさすが奈々子ちゃんだ。

「で、俺がパワフルの天井を打って投資6000円でボーナス。そしてそのコインもってキン肉マンに移動。持ちコインでなんとかMTひいて上乘せやらなんやらで結局23連だ」

そして2人のレシートを見る。

奈々子ちゃんが3069枚で、差枚数なら2219枚。

九条さんが3082枚で、差枚数なら2782枚となった。

計2068+2219+2782で7069枚。

勝負は俺たちの勝ちだった。

「く、最後に失速しなきゃ俺の勝ちだったのに・・・」

「ま、なにせよ俺らの話は聞いてもらう。悪い話じゃないしむしろいい話だと思っているくらいだ。それでも気に入らなかったらそのときはやめてくれて構わないさ。おい朝倉、車回して来い。奈々子ちゃんは今コレ換金してきてくれないか？」

わっかりました〜いい2人はホールを後にした。

九条さんと彼が正面入り口前で車まちをしている。

「おい。お前」

「な、なんだよ」

「火持つてない？ガス切れたみたいなんだけど」

「ないよ。僕タバコすわないし。」

「ちつ。しゃあねえな」そういうとガスのないライターで必死火をつけようとにがんばっている。

「それとお前じゃなくて名前で呼んでくれない？一応さ橘悠人^{たちはなゆと}ていう名前があるんだし」

「そうか、じゃ橘と呼ばせてもらおうか」

「あ、ああ、よろしくな」

「よろしく」

挨拶を交わしたと同時にくらいに朝倉と奈々子ちゃんが到着。そしていつもどおり居酒屋に車を走らす九条であつた。

第十四話

〈準備〉

「まじですか？」

がやがやとうるさい居酒屋に橘の声が響く。

「ああ、本当だとも。どうだ？悪い話じゃないだろう？」

「で、でも違法行為じゃ……」

「そこらへんはきちつとしてくれているらしいし、だめなホールならいかなきゃいいだけだ」

「そうですね。あ、僕は橘悠人、21歳です。これから皆さんよろしく願います」

挨拶もできるし話してみると意外にも好青年だということがわかる。

「で、いつからいくんですか？」

しかも意外にもけっこう乗り気みたいだ。

「ん、まあ、人数そろったし明日にでも行きますよね？九条さん」

「俺は構わないが、そんなに急でみんなの都合は大丈夫か？」

うん、とうなずく面々。

このためにもともと時間に余裕のありそうなメンバーを選んだのだ。

「よし、じゃ、明日の正午に今日のホールに集合でいいか？」

「はい」「わかりました」

みんないい返事をしたところで追加でビールを頼み、僕と九条さんはいつもどおりの閉店までコースとなった。

橘君と奈々子ちゃんはおのおの途中で帰宅しまた明日ということだし、しかし正午の集合にこの人が間に合うのだろうか……

午前九時

さすがにいつまでも居酒屋の駐車場に車を止めるのは忍びないのでホールの駐車場にとめることにし移動開始。

九条さんは相変わらず寝ている。

俺は寝るような気分でもないものでちょっと遅れながらもホールに行き集合時間まで時間をつぶすことにした。

今日はART祭りというイベントらしい。なんともわかりやすいイベントだ。

集合が正午ということを考えれば1、2回は初当たりひいても大丈夫だろう、と考え空いてる戦国無双に腰を下ろす。

すでにキン肉マンやバイオハザードは満席だが戦国はいまなら朝から座れる。

しかしすぐ横に人が座った。

4台あるカドに座っているのにわざわざ横に座られるあたり狙い台なのだろうか？などと勘繰りながら顔を覗き込む。

目が合った。

「やっぱり朝倉さんだ！おはようございます」

目の前にいたのは橘だ。

「あ、ああ、おはよう」

「寝坊しちゃって戦国にしか座れませんでしたよ」

「カド2とかに入れてくる傾向あるの？」

「4台島ならけっこうランダムですんで適当ですよ。そこまではさすがに読めませんが平均設定高めにしてくれまし、今時期戦国残しているということは大事に使いたいということですからね。それに・・・」

「それに？」

「朝倉さんやみなさんとはやく打ち解けたいですしね」

「んじゃ、挨拶代わりに正午までの出玉勝負と行くか？」

「いいですけど、何かけるんです？」

「まけたら出玉総取り、でどうだ？」

「乗った！」

案外乗りやすい性格なのか？第一印象とは大分違う感じた。打ち解けにくいが仲良くなったらとことんタイプなのか。

しかし21歳という年齢の割りにはけっこううまい。

DDTをすっかりし、フルウェイトは当たり前。

どうでもいい演出は全部すっぱかしつつ高確くさいところではしっかり演出を見ている。

なんて考えているうちに先行される。

「朝倉さん、お先っす」

「どうせ低確だろ？こっちは今高確なんだよ」

しかしこれがスカ！結局初当たりは700以上回ってBG単発・・・そうこうしているうちに投資は25本超えて持ちコインはほぼ0。

対して橘はすでに半箱と下皿でART中。

「やばい、な」そうつぶやいた直後に特殊リプレイ。

やっとの当たりは高確でBG、これが無限にはいった。

すでに投資は30本。1500枚のマイナス。

しかしこの無限がいい具合にハマり、400GでBIG無限、55

0BIGで無限ともりもり増えた。

橘は投資4本、200枚で現在1000枚ほどで通常。

投資分を回収しその差があと800枚ほどいったときのART消化中・・・

不意に後ろから手が出てきてボタンをストップ。

ARTが終了・・・

瞬間嫌な気配を感じ後ろを向くと九条さんと奈々子ちゃんが立っていた。

「御機嫌よう諸君、今が何時か知っているかい？」

声に苛立ちを感じる。

恐る恐る時計を見ると午後1時頃・・・

「この遅刻分は君達のおごりで昼飯だな・・・」

「あ、あたしお寿司食べたいです」

「決定だな」

なんか二人とも車でずいぶん待ったみたいでご機嫌ナナメみたいだ。2人で急いでコインを流し車へ向かう。

しかし総取りというルールだから3万もっていかれる。
意気消沈し車へ乗り込みすし屋へ車を走らせる。
俺の運転で。

第十四話（後書き）

アメブロで私の私的ブログをしておりますので興味のある方は覗いて下さい。

ここと同じ虹色定期便という名前でやってます。

<http://ameblo.jp/ultra-rainbow/>
これが直リンク（のはず）です。

第十五話

く到着く

「おいしかったですねー」

「そうだな。大トロなんて久しぶりにたべたよ」

「あぶらっぽすぎて私は中トロくらいがちょうどいいかな。あ、あとエビとかもおいしかったですよねー」

九条さんと奈々子ちゃんは寿司ネタ談義で盛り上がっている。

回らない寿司を4人で食べ3万少々の払いを橘君と折半した。

「そついえば朝倉さんはかっぱ巻きばかりたべてましたよね？」

「え、ええ、まあ好きですからね」嘘だ。もちろん安くすますためだ。

「奈々子ちゃん、そろそろ許してあげたら？」

「ん、ま、いいでしょ」

この二人はただ最初から寿司を食べただけなんだろう、もう怒ってはいないみたいだ。

そうこうしているうちに例のホテル、スターライトホテルに到着した。

「つて、マジでここなんですか？」

「ああ、そうか橘君には言ってなかったか。」

「ビビッたか？」

「べ、別に。ちょっとびっくりしただけですよ」

もつと人目につかないようなところを想像していたんだろう。

俺達は車を駐車場に止めホテルに入っていた。

「ところで九条さん、入場方法とか知ってるんですか？」

「ああ、佐々岡に聞いた」

やっぱり抜け目がない。

九条さんはフロントで何か話をし、そして前回とは違うが支配人らしき人が出てきた。

「さ、いくぞ。」と、いわれついていく。

部屋に到着すると前回と同じような間取りの部屋だった。

これがたぶん参加者専用の部屋なのだろう。

「九条様、朝倉様、ようこそ越しかったです。4名様のチームでよろしいですか？」

「ああ、問題ないだろ？」

「はい。大丈夫です。では失礼して参加登録料のほうを確認してもよろしいでしょうか？」

すっかり忘れていた。そう思ったのと同時に九条さんがバッグをあける。

「1200万入っている。確認はそっちでしてくれ。」

「お預かりいたします。それではこちらをお受け取りください。」
と何枚かのカードを出す。

「なんですかこれ？」

「これは当店の会員カードです。チーム単位で今何枚コインを借りてるか、また貯蓄しているか、とこのカードでの借りたコインと貯蓄しているコインを記憶するものです。」

「個人記録とチーム記録を記憶できるわけね。」

「はい。そうです。このカードについては裏面に詳しいことが書いてありますのでそちらを参照ください。それと新規のお連れの方に当店のご説明をなさってもよろしいでしょうか？」

「いや、こっちでしておく。前回来た時と変更点とかないよな？」

「はい、ございません。それでは失礼します。」

「ご苦勞様」

「それともうひとつ、オーナーが帰ってきているので明日はイベントがあります。何かございましたら私どもを御呼び出しいただくか部屋に備え付けのパソコンでお調べください。たいていのことは専用サイトに記してあります。」

「わかった。それじゃ」

「はい。失礼いたします。」

ボタンと静かに戸がしまると同時くらいに口を開く。

「あのバッグで登録料をいれてたんですか。すみません、俺すっかり忘れていました。」

「なに、気にしてないさ。みんなの分も一緒に払っておいたから。」

「ありがとうございます。」橘君は昨日の今日で用意できなかったみたいだ。

「ははっ、私もすっかりわすれていました・・・」奈々子ちゃんらしい。

「とりあえず説明するか・・・といってもパソコンでしらべられるんだっとな。」

そついいパソコンをたちあげる。

デスクトップにはネットへのショートカットのほかには「SLOT」というフォルダしかない。

とりあえず開いてみると前回説明されたことが載っていた。

当店は紹介制のスロットのみを扱うオーナーとそのご友人による親睦会である。

基本コイン単価は100円と同等の価値があるがイベントによって価値が変動する。

違法性を避けるため店内には現金を置いておらず、またメンバーの皆様による現金の持ち込みは一切禁止とする。

原則としてホールにはチーム全員がいること。誰か一人が退室、または入場しない等は原則認めない。

会員カードの紛失、破損等があった場合は即時に申し入れをすること。

ただし第三者に悪用等されたりしても保障は基本的にない。カードの暗証番号は個人で保管し忘れないようにすること。

営業時間は基本的に朝の9時から深夜3時までの18時間営業。し

かしイベントによつては多少前後する。

機種は原則5号機だけとする。

機種のラインナップ等は変更あり次第ホームページにて更新する。

またイベント等の告知もホームページにてする。

当店ホームページのURLは・・・

と大体のことが載っていた。

「大体のことはわかりました。」

「私も。」

「そうか。じゃ、早速明日のイベント確認、そして明日以降の作戦確認といつていいか？」

「「はい」」

ホームページをみると

『明日は・・・』

大出玉祭り！

裏ルールも盛りだくさん！

詳しい内容は明日ホールで発表！

オーナーが久々にやる気まんまんです』

と書いてある。

「なんか、アバウトですね。機種が絞り込めない。」

「そうだな・・・」

「でも出玉祭りなんだしハイスペック狙いでいいんじゃないですか？」

「ん」

あーだこうだ言い合っていると

「よし、ホールを見に行こう。」

とおもいきつた発言が九条さんからでた。

「まあ、ホール状況がわからなきゃどうにもなりませんね。」

全員一致でホールを見に行く。しかし時刻はまだ午後6時を少し回ったくらいだ。

「とりあえず癖を把握すること、高設定くさい台があれば打つてみる。天井台なども期待値プラスならとりあえず打ってみてホールになれること。」

こういわれ僕達はホールに出だ。

第十六話

（下見）

とりあえずは各々自由行動となった。

俺はとりあえずぐるっとホールを見て回り機種構成、客付き、データー等をみてる。

この時間帯にしては普通のホールに比べ回っていない台が多い。会員制だからしょうがないか、と思いつつホールを徘徊する。

ふと、稼働があがってきていることに気づく。

徐々に客が増えてきたみたいだ。

稼働率も7割以上あるんじゃないか、と思ったところでいったんレストルームに集合と九条さんからメールが来た。

「どうだ？」なんかすっきり九条さんがチームリーダーという感じだ。

貫禄もあるしリーダーなんて俺の柄じゃないから助かる。

「高設定くさい台は何台ありますがやっぱり低設定メインですね」

「あ、私いま青ドンの天井うつてる最中です。」

「急に稼働があがってきましたね。もしかしたらこれから天井台うつるかもしれませんし俺はもうちょっと見に回りますよ」

「そうか。ま、普通の店と違い今日はイベントなんて一切ない平営業みたいだからあまり無理するなよ。んじゃ、また後で。なんかあったらおのおの連絡を取り合うこと。」

俺はそのままレストルームで遅い夕食をとることにした。

ここはドリンクバーがあり大抵の飲み物がそろっている上に無料だ。食べ物も各種定食や麺類などそろっていてこちらでも無料だ。

通常の5倍以上の利益があるんだから無料でも問題ないんだろう。なんてことを考えながらラーメンを食べ終わる。

時計を見るとまだ午後9時だ。

閉店まで6時間近くあることを考えると手持ちぶさは否めない。
ので、低設定でも割りの甘い哲也か武龍あたりでお茶を濁そうとする。

しかし哲也に打てそうな台がないためバラエティの武龍に着席。

こちらはREG後350Gなうえにボーナス確率も悪くない。

ほどなくしてBIGを引く。が、ビタ押し成功率8割少々とビタ押しが苦手なためMAX取れなかった。

でたり入ったりで結局中間設定か？といったところで時刻は深夜2時になった。

そして集合の連絡が来た。

「んで、調子はどうだ？」

「俺は武龍でチョイプラってところでそろそろ止めようかと思ってるところです」

「私、青ドンは天井REGでしたけどそのBIG中に3連ドンが出たんで続行してるんですけど、ちよつと展開が悪いです」

「僕はまだ何も打ってません」

「そうか。んで、俺が赤ドンで400枚のプラスだからまあ、負けではないなみたいだな。」

「客足も大分落ちて今打ってるのも高設定は間違いないみたいな客ばかりだしそろそろ部屋にもどりましょうか？」

「ん、そうだな、じゃ、戻るか」

と部屋に戻ることにした。

「んで、明日からどう攻める？」

「基本全員で高設定狙い、違ったら天井や多機種の高設定狙いでいいんじゃないですか？」

「僕もそれでいいと思いますよ」

「私も」

「そうか。じゃ、きくがもしハイスペック機種の6搦んだら閉店ま

で打つのか？」

「そりゃもちろん・・・」

「じゃ、次の日のイベントが据え置きイベントだとしてもう一日続けて打てるか？」

「ちよつと厳しいですね。」

「だろ？通常の、外の店なら問題ないかも知れないがここは18時間営業だ。18時間スロ打ったら睡眠時間は6時間以下はまず間違いない。上に連日稼働をすればいつかは誰かが体を壊すだろうな」みんなイベント内容や設定状況などを気にするあまり大事なところをおろそかにしてしまったみたいだ。

「つまり、朝一は全員ないし3人で高設定狙いし、はずしたやつは休憩と他の台の状況チェックにまわる。そしてできれば途中から交代して閉店間際まで打つてのが一番だとおもっんだが、どうかな？」

「そうですね。健康面は長く続けていく上で一番大事ですからね。」
「単純に5倍の掛け金で1.5倍長く打てるんだから外の7.5倍の収入が見込めるんだ。なら一人くらいは休んでも問題ないだろ？」
「んじゃ、とりあえず休むか。明日は朝8時30分の抽選に間合うように各自起きるようにな。」

時計を見ると午前3時30分。

寝よう寝ようと思ったが初のホールで初のイベントとなると興奮して眠れない。

どうやら明日は寝不足だなと思いつつ布団に包まった。

第十七話

（本番）

9時開店にあわせ30分前から並ぶ。

告知がないときは基本的に並び順らしいが抽選入場もあるらしい。

「なんだ、俺たちいれて4チームしか並んでないのか」

「ま、平日の朝ですし、一般人はもうすこし後から来るでしょうね。昨日も夕方の仕事終わりくらいからの時間から込みだしましたし」

結局オープンの時間で6チーム29人が並んだ。

俺たちのチーム以外はみんな5人チームだ。

ハイスペック機種は2機種、リンかけと赤ドンのあわせて20台だけ。

なんとか台確保できる並びだ。

開店と同時に2、2に分かれ台を確保しに行く。

俺と橘君はリンかけ、九条さんと奈々子ちゃんが赤ドンだ。

打ち始めて4本使ったところで単独異色BIGと幸先のいいスタートだ。

ボーナス合算確率、MID確率以外に目立った設定看破要素がないのがリンかけのつらいところ。

一応ベルもカウントするが3000Gまわして10回ほどしか差がでないようなものは短時間では役に立たない。

そうこうしているうちにまわりもボーナスを引き出す。

2000弱回したところで九条さんからいったん休憩として集合とのメールが来た。

「なんとか台確保できたな」

「そうですね、並びでよかったですよ、わたし赤ドンであんまり打

ったことなくて」

「なに、中押しで成立小役が見抜けるから」

「中押しでどこ狙いですか？」

「ドン絵柄か7絵柄の好きなほうを枠上くらいに狙うだけ、簡単だろ？とりあえず設定変更後は三尺玉とチェリーのナビが出ないから中押しで成立小役を見抜ければ設定変更もわかるからさ」

「あのう九条さん、上段ドン停止時で成立役なんですか？」

「前ゲームで小役ひいてなきゃ単独ボーナスだよ・・・」

『開始3Gで単独引くってどういうヒキだよ・・・』

「あ、親方選べる」

「それはチャンスゾーンにいたことが確定、ということは前日は天井状態じゃなかったから設定変更確定だな」

「わーい」

『てか、目立ちすぎだよ、他のチームにガン見されてるし』

「どうやら全台設定変更らしいな。これじゃ同一設定の打ち直しもあるかもしれないのか」

結局BIG3回引いて単独なし、ビタでのナビポイントなし、ボーナス確率1/500といいとこなし。

ビタ以外でのナビと自力でなんとか投資を抑えているがなんだかんだマイナスだ。

いったん集合することにした。

「どうです？赤ドンは？」

「全台設定変更みたいだ。とりあえず奈々子ちゃんの台は単独1回引いているしビタでポイント獲得しているから1はないと思うが」

「リンかけのほうはどうなんですか？」

「まだなんとも。とりあえず僕の台は合算1/240でBIG5MID2で中間くさい数字です」

「俺はBIG8MID0と1/220でプラスだかMIDがなくて不安といったところ。3つとなりがさつきちらつと見たらMIDと

合算確率がよかったな」

「そうか、みんなまだなんともいえないか・・・裏ルールでの気持ちになるしな・・・」

とりあえず解散し続行することにした。

午後3時、ここで裏ルールが発表された。

第十七話（後書き）

台のラインナップは8話参照とします。
いずれ変更しますので懐かしい機種をご堪能ください。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1050e/>

至高の作戦

2010年10月10日15時02分発行